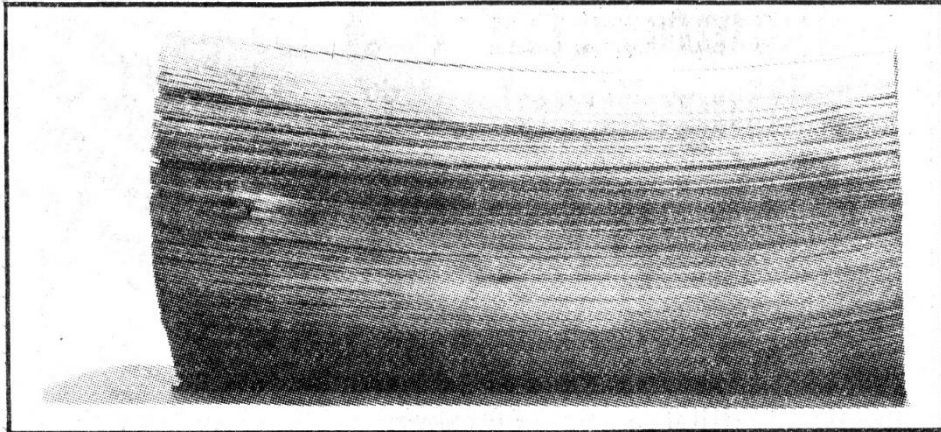


木のアートと風景の彫刻



Kazuo Kadonaga: Wood No 5 E, 1978.

文 : Sune Nordgren

角永和夫は木で制作しており、現在ギャラリー・アロノビッチに出展しています。

アートとは？ その質問に対して、ルンドの Ragnar Jo sephson 教授はいつも標準的な答えを持っています：「税関に尋ねてください-彼らは知っています！」これはまさに、トーマス・ウォールナーがマルメの自由港で苦労したもので、彼はいくつかの展覧会のために日本の角永和夫によってここに芸術を持ち込むことになっていたときに」受けたものでした。

角永は木で、杉の木の幹全体を扱い、ブラフのスキルで扱います。しかし、税関は彫刻を木材として分類することを望んでいたため、まったく異なる条件で輸入を行いました。ログは何も表しておらず、単純さが挑発的です。

角永和夫は、無尽蔵の原料として、そして最も森林の多い日本の彼の家族が製材所を所有している北陸地方の暮らしとして、木とともに育ちました。今日、彼は芸術品への関心を新たにした若いアーティストのグループに属しています。伝統的に日本の芸術を貫いてきた壊れやすいが、壊れていない糸を紡ぐ。私たちの古典的な花崗岩や大理石の文化とは異なり、日本では常に木が支配的であり、建築や彫刻だけではありません。多くの日本の手工芸品は、さまざまな種類の木材の人気のある処理に基づいています。

私たちの森

具体的には、すぐに具体的な文化が世界的に広がるようになったにも関わらず、私たち北部人がまだ多くの森を残して、木材の芸術をよりよく理解できると想像し

たいと思います。いずれにせよ、門長がここに来た時にまさにそれを望んでいた。

彼の彫刻は、多くの人々が世俗的なものとして却下する作品への没入の結果です。彼の著名さの欠如はほとんど取りつかれているようだ。しかし、この物質的な感情には、誇りと喜びのかけがえのないバーがあります。それが本当の何かとは違うものであるかのように。オフロヤさんのように、シャワーやプラスチックの浴槽が嫌いなバスタブメーカー！

現在、角永和夫のガス丸太はギャラリー・アロノウィッチにあります。一見すると樹皮に加えて、未処理の木の幹のように見えます。彼らは重く横になっていて、壁に沿って蒸している。美しく効果的なオブジェクト-しかし、他には何ですか？ 目まぐるしい続編を明らかにするには、簡単な調査で十分です。単純なものは明らかであるだけでなく、通常は、一目で登録できる以上に、思っている以上に多くの情報を保持しています。好奇心は、私たちができるだけ多くを発見するように駆り立てます。そして、体験の重要な部分は、まさに自分自身のために発見するこの機会です。これまでに見たことのないものに直面するには、すべてを確認するよう依頼するのではなく、経験を再考してください。葉の薄いフレーク 細いベニヤで、角永は杉の丸太を薄いシートにスライスしました。ディスクは自重によってのみ所定の位置に保持され、簡単に相互に移動できます。したがって、彫刻は常に変化しています。切り捨てられた木の中で人生は続きます。丸太が床の上に置かれたときに空気がロードされるかのように、重量と休息は顕著な軽さと飛行で揺れ動きます。私たちと同じように、木材は主に空気と水で構成されています。